

# 島と島がつながろう 〜離島ミーティングin祝島〜

祝島 國弘 秀人

先月2月22日(金)から24日(日)にかけて、祝島において「離島ミーティング」を開催しました。

参加したメンバーは、一昨年の9月に日本離島センターが主催した「第20期 島づくり人材養成大学」(「わいわいタイムス」2011年11月号参照)を共に受講した仲間と、その家族です。お互いの島を訪問して交流を深め、島づくりについて語り合おうと企画されました。1回目の「離島ミーティング」は昨年9月に対馬で開催され、今回が2回目の開催になります。

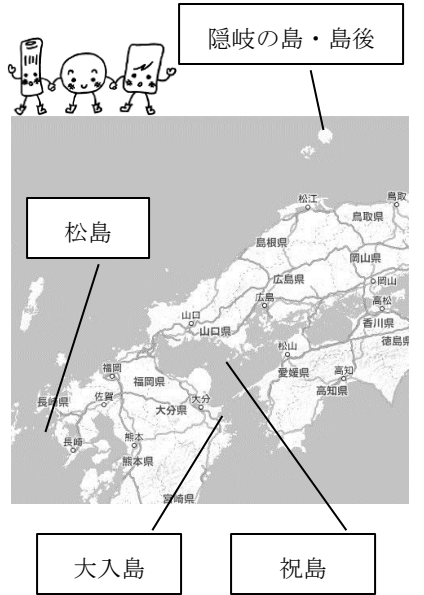
参加したのは、隠岐の島(島根県隠岐の島町)から勝部靖男さん・たず子さん(ご夫妻)、松島(長崎県西海市)から辻脇茂行さん、大入島(大分県佐伯市)から高盛西郷さん、そして祝島からは私と妻の優子です。練堀の町並みや、平さんの棚田、行者堂、氏本農園のブタの放牧など、祝島の観光スポットを私たちがガイドして歩き、夜は民宿でお酒を酌み交わしながら、それぞれの島の自慢や課題などを話し合い、交流を深めました。

## ◎それぞれの島の紹介

祝島以外から参加された皆さんの、それぞれの島の特徴などを紹介します。



石積み前の練堀の前で記念撮影



## ◆隠岐の島・島後(おきのしま・ごごじま)

島根半島の沖合約80キロの日本海に浮かぶ隠岐諸島の1つ。人口は約1万5千人。多くの流人たちがもたらした雅な貴族文化や、北前船の往来によって運ばれてきた多種多様な文化が島の風土にとけこみ、独自の伝統と文化が生まれました。相撲が盛んで、大相撲の「隠岐の海」の出身地。隠岐古典相撲を題材にした映画『渾身』が現在公開中。牛を闘わせる「牛突き」も有名です。「隠岐の島ウルトラマソン」などのイベントも開催されています。

## ◆松島(まつしま)

九州本土・長崎県西彼杵半島からわずか1キロ足らずの距離にあります。江戸時代より以前は人家はあまりなく、松林が広がっていました。元禄期に捕鯨が行われるようになって、一気に活気づきました。その後、石炭の採掘が行われるようになり、さらに人口が増え、大正末期には1万3千人になりました。昭和38年に炭鉱が閉鎖され、現在の人口は約6百人に減少しました。昭和56年に稼働を始めた石炭火力発電所があり、百万kWの発電量を誇っています。島には江戸時代の町並みや炭鉱跡などの遺産が残っており、「日本一小さな公園」という名前の公園もあります。福山雅治さんの名曲『桜坂』は松島の桜坂がモデルだと地元では言われています。(福山雅治さんは高校卒業後の一時期、この島の火力発電所に勤務していたようです。)

◆大入島(おおにゅうじま)  
大分県の佐伯湾の奥に位置しています。佐伯港から約7百メートル、フェリーやマリナーバスが数多く運航されており、時間も10分足らずの近距離にあります。そのため、島から佐伯市内に通勤されている方も多いためです。現在の人口は約9百人。漁業が盛んな島で、魚種も豊富。特にちりめん・いりこは全国的にも有名です。

## ◎島が抱える課題

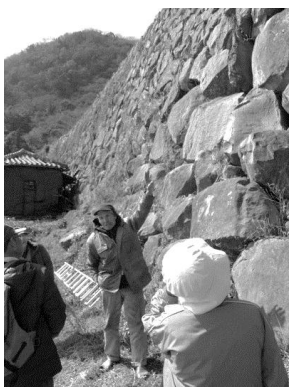
参加された皆さんの島の課題として、次のような項目があげられました。

- ・人口減少と高齢化(各島の共通の課題)
- ・買物物が不便(各島の共通の課題)
- ・魚の価格の下落(各島の共通の課題)
- ・輸送費が高い(各島の共通の課題)
- ・イノシシやタヌキによる農作物への被害(松島)
- ・捕った魚介類の鮮度を保って本土へ届けるのが難しい(隠岐の島)
- ・架橋の問題が30年間進展しない(大入島)

## ◎参加者が感じた祝島の魅力

祝島の魅力について感じたことをあげていただきました。

- ・4年に一度の「神舞」をずっと継承しているところ
- ・平さんの棚田は、他には



平さんに棚田の説明を聞く

どこにもない規模で、島の宝物  
・異次元空間のような練堀のせまい路地  
・島の人が気軽に挨拶をしてくれること  
・集落が、一か所に集まっていること  
昔からの文化があること

## ◎参加者から祝島への提案

こうしたらもっと祝島が魅力的になるのでは、という点をあげていただきました。

- ・島内に大きい案内板が欲しい
- ・平さんの棚田へ行く途中の距離表示をもっと大きく見やすいものにして欲しい
- ・草で隠れている段々畑の石垣をもっと見えるように草刈りすれば、平さんの石垣と共に観光に寄与するのではないかと
- ・平さんの棚田は将来も残して欲しいので、島外からのボランティアも含めてみんなで手入れするなどしてはどうか
- ・石豆腐の料理のバリエーションをもっと増やすといいのではないかと
- ・練堀を白い漆喰で統一したら、もっと素晴らしいくなるのではないかと

## ◎離島ミーティングの意義

島同士の交流を深め、お互いの島の魅力を発見したり、島の課題を解決するヒントを見つけれたりすることは、とても意義のあることだと思えます。参加者の皆さんは、それぞれの島の活性化に尽力されておられる方々であり、こうして年に一度でも顔を合わせて話し合うことで、互いに刺激され、普段の活動にプラスの効果があるのではないのでしょうか。将来は、行政の離島振興担当者などにも参加していただければと思います。

◎「わいわいタイムス」4月号は4月7日(日)発行予定です。